実践ファイル

第6回 お茶の水女子大学 ライフ×アート展について

堀井武彦
（小学校教員）

お茶の水女子大学ライフ×アート展の経緯

ライフ×アート展の始まりは、本学附属小学校のアート教員を中心としたグループ展「ハーフミラー展」でした。その後、会場を民間画廊から〝OCHA HOUSE（ユビキタス実験住宅）〟に変え、出品者も本校附属校園関係教員等が加わり、より広範囲の対象に発信するようになりました。というのも、本学は、キャンパス内に、いずみナーサリー（学内者向け乳児保育施設）、お茶の水女子大学こども園、附属幼稚園・小学校・中学校・高校が併設されている国立大学唯一の環境にあります。この環境の利点を生かして、主に教育現場で固定的に捉えられてきたアートに対する認識を問い直し、ライフ（生命、生活、人生）とのかかわりを探究する場の提起を主旨とした〝ライフ×アート展〟が誕生しました。２０１７年からStudent Commons（学生会館）の多目的スペースを活用することによって、より空間的、行動的な展示やワークショップの実施が可能になってきました。

堀井武彦（ほりい たけひこ）
お茶の水女子大学附属小学校教諭。

〝やってみなければわからない〟アート

一般的に教育現場における展覧会では子どもたちの作品を整然と掲示するイメージがありますが、本展覧会では活動の結果のみならず過程を大切にしたいという思いを主旨としていますので展示の様子もさまざまです。運営準備会の〝アート実践研究会〟で各展示の概要を交流はしますが、展示形式や様式の計画は、便宜的なスペースの割り当てを除き、各担当者に任されています。したがって、展覧会が開催されるまで誰も全体像のイメージをもてません。つまり〝やってみなければわからない〟わけです。この〝やってみなければわからない〟というアート的思考を本展覧会では大切にしたいと考えています。

生後6か月から大人までのアートの実相

今回の展覧会は、2019年8月6～8日に開催されました。生後6か月（今年度の場合）から大人までほとんどの世代の〝ライフ×アート〟の実相の一面を見渡すことができます。紙幅の関係で全貌を紹介できませんので、便宜上、幼児の活動を中心に紹介します。

◆遊びの中の〝笑い〟をテーマに（附属幼稚園）

子どもの姿を〝笑い〟という視点で見つめ直すというテーマの附属幼稚園の展示は、園生活の中のさまざまな場面での子どもの笑顔の記録（写真下）や、子どもたちが上がって面白いお

話を紹介するかわいらしい〝高座（実物）〟のコーナーが設けられていました。

目の前の事象からおかしさ、面白さ、楽しさを感じ取ったときに子どもたちが笑うのは言うまでもありませんが、びっくりしたとき、感動したとき、大発見をしたとき、達成感を味わったとき、失敗したときなども、子どもたちは〝笑い〟でその時の感情を表現することがあります。「見て、見て、これ！」と得意げに自慢の造形物を差し出して保育者に共感を求めるとき、子どもは〝笑い〟を触媒として意思の疎通を求めます。また、友達と一緒に遊んだり、活動に没頭したりする際に、〝笑い〟が仲間とのつながりをつくり出している姿を目にします。この〝笑い〟の発生源としてアートの特色的な要素である形や色が子どもの身体全体の感覚に働きかけていることを確認できる展示でした。

◆〝観る〟だけでなく〝体験型〟の展示

本展覧会では、活動報告の展示以外に子どもを中心とした参観者が体験できるコーナーやワークショップを併設しています。静的な展示を〝観る〟だけの鑑賞活動は子どもの時間を持て余してしまうからです。

今回はお茶の水女子大学こども園企画「未来の教室」の活動に、本学理学部の森 義仁先生が協力され、こども園の用務さんが製作した木製装置（写真左）が、参観者体験型展示として出品されました。安定感があり、丁寧に角の処理がされた木製の土台に送風機と透明のアクリル製の筒が組み込まれ、筒の下から、アルミホイル、布、折り紙の鶴等、軽量な素材を差し込むと送風機からの風によってそれらが浮遊する装置です。こ

の現象は大人でも引きつけられます。屋内でスカイダイビング体験ができるFly Station（フライステーション）を彷彿させる装置でした。あらかじめアルミホイルで作られた箱や折り鶴なども用意されていましたが、子どもたちはそれだけでは飽き足らず、布やトイレットペーパーなどを次から次へと装置に放り込みます。〝面白い〟という感情はそのまま子どもの〝探究心〟の表れと読み取れました。子どもたちの活動に寄り添っていた森先生が「子どもの探究は、最後は破壊へ向かう」と笑顔で語られていたのが印象的でした。

◆参会者との対話（トークイベント）

今回のいずみナーサリーの展示は、一番小さな生後6か月前後の子の日常の展示でした。「小さい人たちの手が面白くて記録しました。普通に拾ってきたものや草花を展示すると、本当に日常がアートになると思いました。小さな子どもたちは、生活、生きることそのものがアートなんだな、と思いました」と紹介があり、「写真を撮るときに注意していることは？」という保育関係の参会者からの質問に、「この人が何を見ているんだろう、何を感じているんだろう、という思いをもちながら撮るようにしています」と、子ども目線の素敵な交流がありました。

ライフ×アート展のほんの一部をかいつまんでの紹介となりましたが、展覧会の主旨や雰囲気を少しでも感じ取っていただけましたら幸いです。いよいよ来年は東京オリンピック・パラリンピック開催の年です。第7回ライフ×アート展は、ユニバーサルデザインを意識した場にしたいと夢を膨らませています。